

# パラオのケズについて

## －現地調査と<sup>14</sup>C年代測定の間接報告－

伊藤雅乃<sup>1</sup>・奥野 充<sup>2</sup>・中村俊夫<sup>3</sup>

1: 株式会社パスコ 横浜支社

2: 名古屋大学大学院人間情報学研究科

3: 名古屋大学年代測定資料研究センター

### 1. はじめに

青柳まちこを会長とするミクロネシア文化調査会は、1994年からパラオで発掘調査を行っている。パラオには、ケズ（禿げ山）と呼ばれるテラス状階段遺構がバベルダオブ島を中心に点在している。ケズは、かつて八幡一郎<sup>(注1)</sup>により山上遺跡として紹介され、土方久功<sup>(注2)</sup>、オズボーン<sup>(注3)</sup>、ラッキング<sup>(注4)</sup>らにより調査されてきた。1960年代にケズについて詳しい調査を行ったオズボーン<sup>(注3)</sup>は、“テラス状丘陵は、自然丘を利用し頂上から麓まで階段状にテラスを築いたもので、防衛機能をもつ山城であった”と報告している。一方、ベルウッド<sup>(注5)</sup>は、“なかには100m（幅）という大規模な段丘もあるが、山城によくみられる防壁の設備は頂上になく、…防御と農業の双方の機能を兼ねたもの”と推測している。

土方<sup>(注2)</sup>などの報告を調べる限り、現在のパラオの人々の間にはこの遺構についての神話や伝承はほとんど伝わっていない。

このようにパラオのケズと呼ばれるテラス状階段遺構について、いつ・誰が・どういった目的で築造したのか十分な調査研究はなされていない。我々は、1994年からアイメリーク州のElechui地区でテラス状階段遺構の発掘調査を行っている。1995年の調査で第1文化層の直下から採取した2つの炭化木片について名古屋大学のタンデトロン加速器質量分析計を用いて<sup>14</sup>C年代を測定した。本稿では、これまでの現地調査結果とともに<sup>14</sup>C年代値を報告し、それらがどのような意味を持っているのかについて考察する。

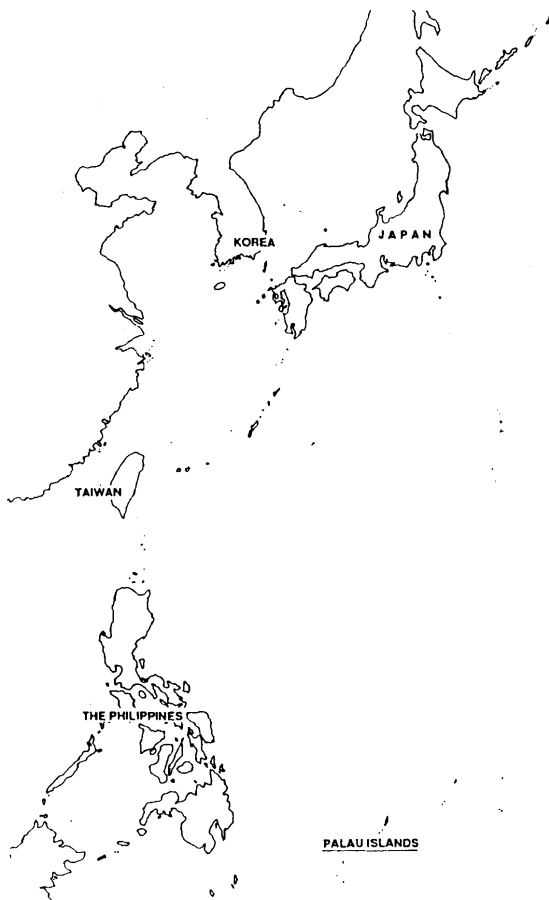


図1 パラオの位置

## 2. ケズについて

Elechui地区での発掘調査を報告する前にもう少しケズについて説明したい。現在のところ、パラオ政府もケズについての詳細な分布資料を持ち合わせていない。そのため我々はフランスの人工衛星スポットの画像を入手し、あらかじめ調査計画をたてて、1995年度の調査時にセスナ機からビデオとカメラを用いてパラオ全島を撮影した。その結果、パラオ全島におけるケズの分布状況を明らかにした(図2)。ケズは、カヤンガル・ペリリュウ・アンガウルを除くバベルダオブ本島とコロールにしか分布していない。その中でも特にケズが多く分布している地区は、バベルダオブ本島の南に位置し国際空港のあるアイライと、我々が発掘調査を行っているアイメリーク、またバブルダオブ本島の北に位置するアルコロン・ガラルド・ガラスマオである。また、ケズのほとんどが海岸線より数百メートル入り込んだ内側に位置し、バベルダオブ本島の内陸部には一つも分布していないことがわかった。土方<sup>(注1)</sup>によると、コロールにもケズの存在が報告されているが、我々の調査では確認できなかった。

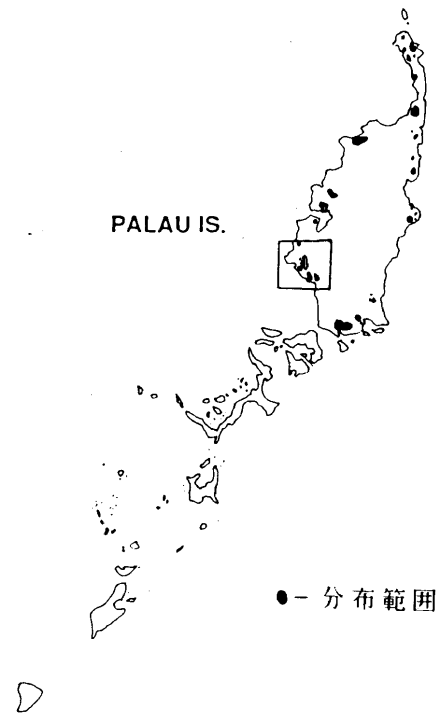


図2 ケズの分布図

ケズについてはベルウッド<sup>(注5)</sup>の報告にあるように、100mを越える階段状のテラスが広がり、日本に点在する段々畑を思わせる。階段状の頂上部には、山城のように平たい面を形成し、四角の一辺に低い土盛りのようなものを築造しているものもある。ケズの多くは、山の尾根線を利用して作られている。頂上部では階段状に尾根を削り、麓の階段状のテラス部分では盛土<sup>(注6)</sup>にし、階段を形成している。一地区での規模は、我々の調査しているElechui地区がパラオ全島で一番広く約1km<sup>2</sup>以上の規模を持つ(図3, 4)。

## 3. 発掘調査の概要

1994年の表面調査で、アイメリークのElechui地区にある道で、テラス状の階段を削り道路を作っていた崖の断面に、遺構の掘り込みを発見した。しかも、その掘り込みから土器や剥片石器が見つかったため、この断面の上のテラス部分を発掘する事とした。8m×6mの発掘区と1m×6mのトレンチを設定し1994年8月と1995年8月の2回にわたり深さ25cmのところから配石遺構を掘り上げた(図5)。発掘区のほぼ中心に並べられた石の中に3つの石皿が出土した。おそらくこの配石の出土した面が当時の生活面と思われる。遺物も石斧2点・敲石1点・凹石1点・フレーク十数点・黒色で薄手の破片の土器百数十点出土した。我々は、この配石遺構面を第1文化層とした。この第1文化層の配石の直下から炭化木片2点(試料1-C1, 1-C2)が出土した。

1996年8月の3回目の調査では、さらに下の層へと掘り下げていき、深さ約

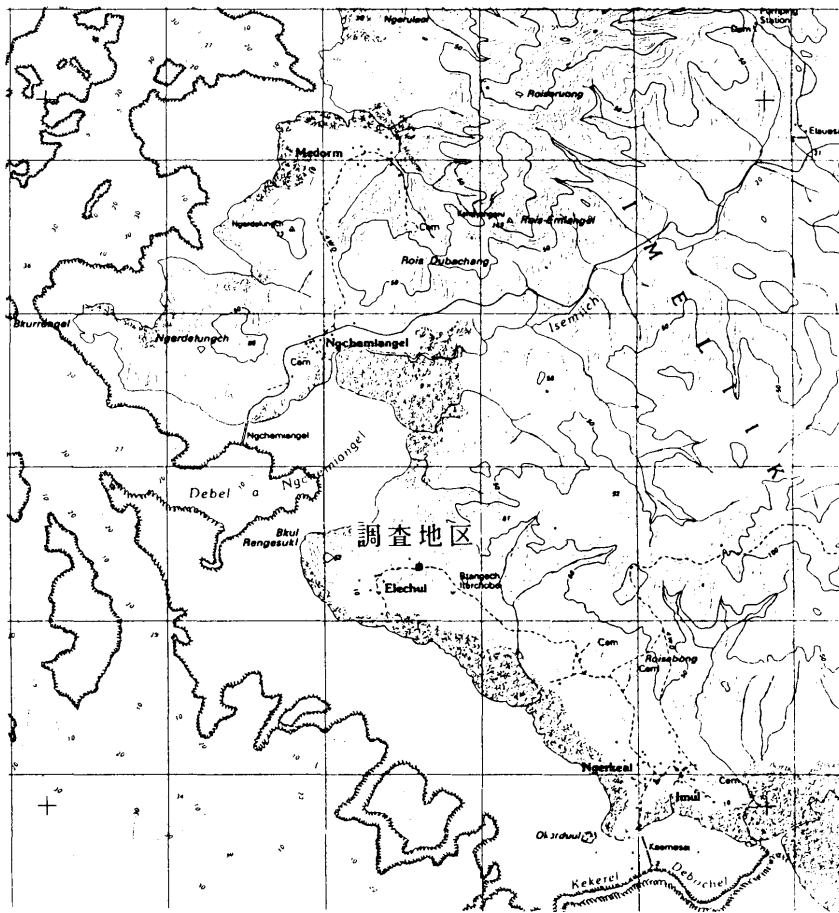


図3 発掘調査地点



図4 Elechui地区でのケズ（現況平面図）

80cmで3つの集石炉が出土した。第1文化層からしだいに掘進めていくにしたがい、集石炉を中心にいくつかの炭化物を採取できた。集石の下にはわずかな堀込みを確認し、我々はこの堀込みの面を第2文化層とした。この層からは石斧2点・石核2点・剥片石器3点・フレイク十数点・褐色もしくは赤褐色をした厚手の土器を中心に破片百数十点が出土した。この層の炭化物の年代測定はまだ行っていない。

この発掘調査で注目すべき点が大きく2点ある。第1点は、現在のところ出土物が、土器や石器のみで骨角器・貝製品が1点も出土していない点である。第2点は、第1文化層出土の土器と、第2文化層出土の土器を比較して色・厚みに違いが認められる点である。その他にも、遺構や遺物について特記しておかなければならない点があるが、これらについては別稿に譲る事とするが、パラオでは、土器編年はまだ確立されていないことも付け加えておく。

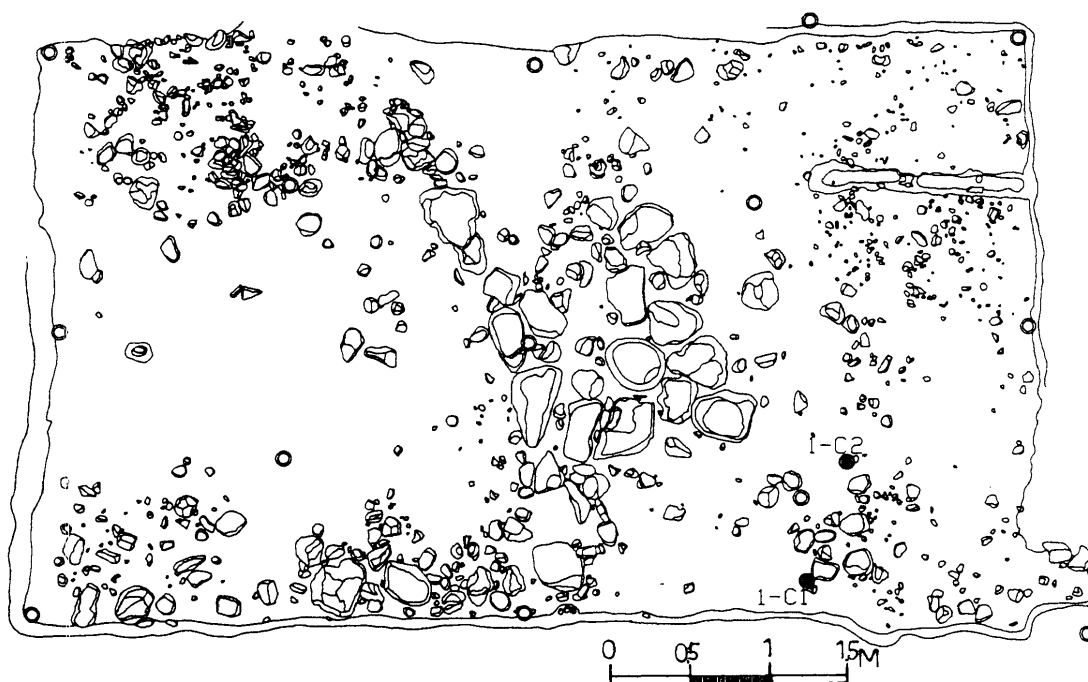


図5 第1文化層の平面図

#### 4. 年代について

今回、我々は第1文化層の配石直下の2点の炭化木片（試料1-C1, 1-C2）について<sup>14</sup>C年代を測定した。年代測定の結果を表1に示す。得られた年代値は、試料1-C1が $480 \pm 80$  yr BP (NUTA-4499)、試料1-C2が $590 \pm 80$  yr BP (NUTA-4500)であり、両者はほぼ近い年代を示している。これらをStuiver and Pearson<sup>(注7)</sup>の樹輪較正曲線を用いて暦年代を求めると(表1)、配石遺構の年代は14世紀末から15世紀初頭ではないかと推察される。1996年の3回目の調査で採取した炭化物は、少なくとも第1文化層よりは古い年代が期待されるが未測定である。この試料の<sup>14</sup>C年代が測定されれば、第1文化層から出土した黒色の薄手の土器と、第2文化層から出土した褐色・赤褐色の厚手の土器の時代を決定するうえで重要な資料となると思われる。

表1 年代測定結果

Sample	Material	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$^{14}\text{C}$ date (yr BP)	Cal range AD/ (Probability %)	Lab no. (NUTA-)
1-C1	Charcoal	-28.9	480 ± 80	1326-1335 (3.8) 1395-1524 (85.9) 1595-1619 (10.3)	4499
1-C2	Charcoal	-25.8	590 ± 80	1306-1364 (60.8) 1375-1413 (39.2)	4500

パラオでの遺跡発掘に関連する年代値の報告例はきわめて少なく、手元にある資料では、オズボーン<sup>(注3)</sup>、ラッキング<sup>(注4)</sup>、高山 純<sup>(注8)</sup>らの発掘調査で報告されている。今回その一部と、我々が得られた第一文化層の年代について比較したい。高山<sup>(注8)</sup>は、1977年と1978年の2回にわたり調査を行っているが、アイメリークでの発掘調査は行っていない。しかし、いくつかの調査地点の中でコロールでの発掘調査で年代測定のためのサンプリングを行っている。地点TP-10の層位V（深さ130cm）と地点TP-12の層位VI（深さ170cm）の年代値は、それぞれ420 ± 80 yr BP (N-3289) , 555 ± 75 yr BP (N-3114) であり、我々の第1文化層で得られた年代と近い値を示しているが、深さにおいて我々の調査地点よりも約6倍もある。

ラッキング<sup>(注4)</sup>もアルモノグイのUluang地区で民族・考古学的調査をおこない、発掘調査で出土したサンゴ試料について年代測定をおこなった。ラッキング<sup>(注4)</sup>は、1点が7～10cmの深さで285 ± 75 yr BPと2点目が深さ20cmで420 ± 75 yr BPの年代値を得ている。この結果から、1600年頃ごろUluang地区に人が住みつき始めたと推定している。

今回我々の得られた年代と、この2つの例は、場所が大きく離れ、高山<sup>(注8)</sup>の調査した遺跡の場合、ケズではないので遺跡の性格も違うため単純に比較することはできない。しかしどちらの場合にしても、現在のパラオにおける発掘調査から得られた年代測定資料では、ケズは紀元前といった時代に築造されたものでなく。約10世紀ぐらいから16世紀にケズを築造、もしくは生活し始めたのではないかと思われる。

## 謝辞

パラオでの発掘申請を認可ていただいたKanai氏をはじめとする関係者に深く感謝します。

## 注

注1 八幡一郎 1943 「南洋文化雑考」青年書房昭光社。

注2 土方久功 1956 パラオ石神並びに石製遺物報告。民族学研究，第20巻3-4号。

注3 Osborne, Douglas 1966 The Archeology of The Palau Islands An Intensive Survey; Bernice, no. 230. Honolulu.

注4 LaurieJ, Lucking 1990 Terraces and Traditions of Uluang: Ethnographic and

- Archeological Perspectives on a Prehistoric Belauan Site. *Micronesica* Suppl 2.
- 注 5 ピーター・ベルウッド 1989 「太平洋」法政大学出版局（植木武・服部研二訳）。
- 注 6 1995年の発掘調査でトレンチを入れた際、丘陵の上に盛土をして階段を形成していたことを確認成していたことを確認している。
- 注 7 Stuiver, M. and Pearson, G. W. 1993 High-precision bidecadal calibration of the radiocarbon time scale, AD 1950-500 BC and 2500-6000 BC. *Radiocarbon*, **35**, 1-23.
- 注 8 高山 純 Archaeological Investigation of PAAT-2 in the Palaus（出典不明）。

## Preliminary Report on Excavation and <sup>14</sup>C Dating of Ked in Palau

by

Masanori ITO, Mitsuru OKUNO and Toshio NAKAMURA